



A piece of Memories Adelaide

A piece of Memories Adelaide

水野陽子

MIZUNO Yohko

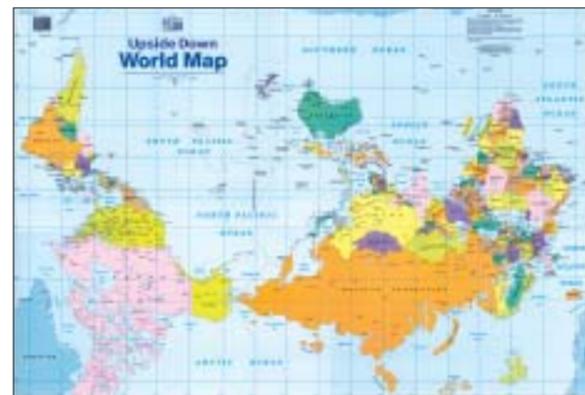
株式会社東建コンサルタント



いまから4年前、息子がオーストラリアの大学に進学した。彼が太平洋を往復しても、私が往復しても航空運賃には変わりはない。そこで私が訪問することにした。そんな訳で、都合6回ほど彼のいたサウスオーストラリア州アデレード市を訪れた。

1. アデレードという街

サウスオーストラリア州はオーストラリア大陸の中央南



■図1-オーストラリア人の知らない、有名なアップサイドダウン地図



■写真1-クックの標識

■写真2-クックの監獄

部に位置し、面積は日本の約3倍、人口は約150万人とされている。その州都がアデレードである。アデレードはオーストラリアで5番目に大きな都市だ。

この街は他の都市と違い自由移民によって街造りが行われた。テラスと呼ばれている大きな通りで囲まれており、ヴィクトリア広場を中心に基盤の目のように区画整理されている。街の中には緑が多く、庭園都市とも呼ばれている。春先にはジャカランダという樹の薄紫色の花が咲き乱れる。

アデレードの飛行場は市内から車で10分ほどの所に位置している。到着後は空港にいるビーグル犬(麻薬探索犬?)に、日本から持ち込んださまざまな食料品を押収されないように、大きな荷物を引きずりながら一目散にロビーの外に脱出する。このビーグル犬も訪問回数を重ねるたびに大きくなり、つい頭でもなでてあげたくなる。しかし、工作中的の彼女には決して触れることは許されない。

2. 学生寮の生活

息子の暮らしていた寮は、市内でも高級住宅地にある。かつてはお金持ちの家だったようだ。それを私企業である寮が買い取り、増改築を重ね、最近では庭の一部もつぶして新館を建築した。半地下にはミラーボールのついたホールがあり、ビリヤード台やピアノが置かれていた。月に1回は寮生全員でダイニングホールでの夕食会があり、そのあとに寮長(エリザベステラーを彷彿

させる強いアイメークの50歳代後半の美人。寮生は“ボス”と呼んでいる)を囲み、その地下ホールで食後のコーヒーを飲んだりするようだ。

この会に私も参加できた。オーストラリア人はショートパンツとTシャツが大好きだ。体の大きな彼らにはよく似合っている。上級生とボス並びに何人かの理事は、そのスタイルの上にガウンを羽織って、正面のちょっと高い台の上の席に着く。ハリポッターの映画の1シーンのような光景であるが、オーストラリア流はちょっとコミカルだ。

息子の部屋は8畳ほどで、ベッドと机、クロゼットが備え付けられており、床にエキストラのマットが一枚置ける広さがあった。元は大きな部屋だった所を、ブロックで壁を作りいくつかに分けたようだ。彼の部屋に泊まる場合は、1泊当たりA\$5でマットを貸してくれた。

部屋割りは日本だったら男子寮、女子寮が厳格に分かれていそうだが、ここではそういう区別は全くなく、トイレとシャワーも共同使用である。

初めてシャワーを使った時にはビックリした。シャワーブースのドアは、小柄な私だったらすっぽり隠れてしまうが、長身のオーストラリア人では頭が飛び出てしまう。そのドアにバスタオルをかけて置くことが使用中のサイン。女の子がバスタオルを巻いて、衣服を抱えて裸足で出てきて“Hi”と挨拶をして通り過ぎていくのに又ビックリ。私が慣れないためにシャワーに手間取っている間に、センサー方式の照明が消えてしまい、誰も来そうにないので仕方なく自分で出て行きセンサーに手をかざし、大慌てでシャワーブースに戻ったこともあった。

3. 簡易ホテルに变身する学生寮

寮の中には所々に簡単なキッチンがある。大学が休みに入った翌日から食堂も閉鎖になり事務職員も長い休暇を取ってしまうため、寮としての機能が休暇状態になってしまう。そしてバックパッカー用のホステルへと变身し、滞在費が値上がりするのである。それでも1泊に付きA\$17ほどだ。こういう時はほとんどの学生は家に帰ってしまう。そこで息子のように居残る学生が、「ワーデン」という職に就き、ホステルのフロント係、見回りを当番で行う。ワーデ



■写真3-先頭の機関車

■写真4-最後尾のカートレイン



■写真5-地平線に溶ける線路

■写真6-オーストラリアン・ウェッジテイル・イーグルの代わりに飛んでみる

ンはこの間の滞在費が免除され、若干の報酬が支払われるようだ。

大学のホールなどでも様々なイベントが開催される。参加するのは、若い人達ばかりではない。年金で生活しているシルバー世代も、この寮に泊まってそういうイベントを楽しむにくる。そんな時期にはこのキッチンが大盛況だ。

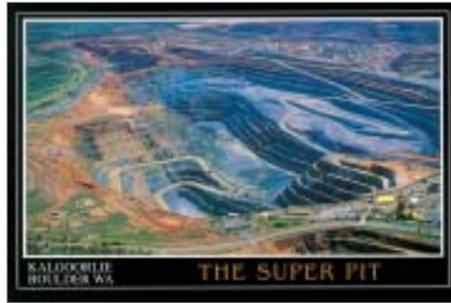
ある時オーストラリア人のシルバー4人組がワインと料理で宴会をしていた。隣で私たちは持参のルーでカレーを作り始めた。だんだんいい匂いがし始めると、彼らが話しかけてきた。私も片言の英語で彼らの話に混ぜてもらい、ワインをごちそうになり、また私たちのカレーも試食してもらったり、ご飯の炊き方を教えたりした。彼らはパースから車で1週間かけて来たと言っていた。

他にも何人かのグループが滞在していたが、私が帰国した後も彼らは毎晩真夜中まで廊下で騒ぎ、楽しんでいたらしい。昼間は各自の部屋で本を読んだり、お茶を飲んで話をしたりしているようだ。日本にもこの程度の料金で泊まれるような施設があれば、もっと気楽に旅を楽しめるのと思う。

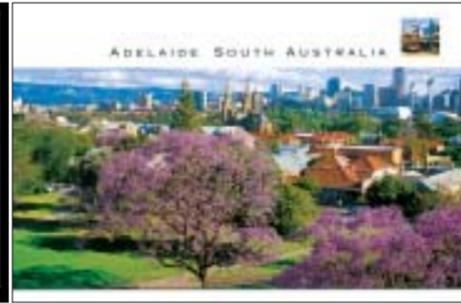
この寮がホステルに变身することで、収益を上げていくとは考えにくい。社会に対するひとつの役割を果たすために、こういう形態をとっているように思えた。

4. 思いがけないところで見た日本の習慣

訪問回数を重ねるうちに息子の友人が、私自身の友人のようにになっていく。彼らが日本に強い憧れを持って



■図2—カルグーリーのスーパーピット(絵はがき)



■図3—ジャカラダの咲く、アデレード(絵はがき)



■図4—鉄道路線図(グレートサザンレールウェイ公式サイトより)

いるのに驚かされた。オーストラリア人、シンガポール人、韓国人、マレーシア人、ハンガリー人、香港人(これはちょっと不思議な区別に思える)、中国系・インド系・イタリア系オーストラリア人など。様々な国籍と顔を持った若い人が、かつて私が彼らと同じ様な年齢のときに欧米の文化や物に強い憧れを抱いたのと同じようなまなざしを、日本という国に向けていた。彼らの期待に応えられるような日本であって欲しいと思う。

アデレード郊外から来ていたサラとレイチェルという姉妹が寮から新しいアパートに移り、その新居の披露パーティー(ハウスウォーミング・パーティー)に私たち親子も招いてくれた。私たちのほかにもシンガポール人、マレーシア人、韓国人が招かれていた。

この日も一つビックリしたことがある。驚いたというより、むしろ感動した。席についたときに、私たち親子以外の人達が両手を合掌し、誰の合図があったわけでもないのに「いただきます」と日本語で同時に言って、食事を始めたのだ。英語では「いただきます」にあたる簡潔な言葉がない。これは日本語と日本の文化の美点だと思う。言葉も文化も超えて、若い人達が合図として用いるには都合がよかったのかもしれない。こうやって言葉が混ざって新し

い文化が育っていくと、いつか言葉がひとつとなり、お互いがより理解できるようになり、争いもなくなるのではないかとかすかな期待を持った。日本では失われていきそうな習慣や言葉に、思いもかけない場面で出会った。

5. ゴールドカンガルークラスの列車

4回目に訪問した時は年末だった。太平洋とインド洋を結ぶインディアンパシフィック号がシドニー～パース間(4,352km)を走っている。シドニーからパースまで3泊4日の旅、アデレードからは2泊3日の旅となる。世界で一番長い直線の線路(476km)を持つ鉄道である。この鉄道でパースまで小旅行に出ることにした。

オリエンタル急行ほど豪華ではないが、レッドカンガルークラス(エコノミークラス)、ゴールドカンガルークラス(ファーストクラス)に分かれている。ゴールドカンガルークラスは1人用と2人用の個室からなっている。全行程に食事が付き、部屋にトイレ、シャワーの設備もあり、料金は1人7万円ほどだった。決して安い金額ではなかったが、こんなチャンスは二度とないと思い、奮発してゴールドカンガルークラスの2人用個室を予約した。

私たちが乗ったのは、新年のカウントダウンを列車の中で迎えられる便だった。パース行きは週2便。全30両程の長い列車は、アデレード駅のホームからはみ出して止まっていた。旅客は、退職し年金生活を向かえた年齢の夫婦がかなりの割合をしめていた。列車の個室には日本の寝台列車の寝台より幅の広い座席がある。シャワーブースはステンレス製で、その中に引き出し式の洗面台と、その下に同じように引き出し式のトイレが格納されていた。私たちには十分なスペースだったが、体の大きなオーストラリア人には気の毒な気がした。

各車両には担当のパーサーが付く。私たちの担当はソニアという陽気で元気な典型的オーストラリア人だった。食堂車の席が限られているため、食事の時間は2パターン用意されている。

6. 列車の中でのカウントダウン

アデレードを午後出発する。列車はとろとろと進んだ。

ポートオーガスタ駅の手前で線路は分岐する。東に進路を取ると、シドニー、メルボルンを目指す。ポートオーガスタから400kmほど西のタークーラーから北へ進めばアリスプリング、エアズロックを通り、ダーウィンへ行く。私たちの列車は西に進路を取りパースを目指す。

その日の真夜中にラウンジカーで新年のカウントダウンがあった。クラッカーなども用意されていて、にぎやかに新年を迎えた。一番ノリノリだったのは、ソニアたち従業員だった。その年のテーマカラーのブルーキュラソーで色付けをしたシャンパン(もちろんオーストラリア産のスパークリングワイン)が振舞われた。車掌さんが女性客一人ひとりの頬にキスをして、男性客とは握手をして新年の挨拶をして回っていた。東洋人の私には一瞬躊躇して手をさしだしてきたのだが、こういう華やかな新年を迎えることもそうそうはないと思い、他の方々と同じ挨拶をした。

窓の外は満点の星。地平線ぎりぎりまで星がみえる。南十字星も旅路を見守ってくれていた。列車の緩やかな振動が、心地よい眠りに誘ってくれる。

7. 車窓からの風景

翌日は最初の停車駅であるクックに着く。駅といってもホームも何もない。右・シドニー、左・パースといった感じの標識が1本立っているだけである。このあたりから、ナラボー平原のはじまりだ。「ナラボー」とはアボリジニの人たちの言葉で「何にもない」という意味だそう。クックは、かつて鉄道が輸送機関の花形であったときに従事していた人々が住んでいた。時の流れとともに飛行機や、自動車に輸送手段を奪われ、それと共に多くの人が仕事を失いクックを去ったのであろう。現在の住民登録は2人だけらしい。不動産屋の物件広告がそらぞらしく見えた。町外れには飛行場、というより滑走路があった。

1時間程の停車中に列車に水を補給し、タオル、シーツ等の交換を済ませる。ここから東京～京都間ほどの直線線路が続き、赤茶色の大地がはてしなく広がる。線路が地平線にすいこまれていた。私は、このインディアンパシフィック号のシンボルマークになっている、オーストラリアン・ウエッジテイル・イーグルという翼を広げると2mにもなるという鳥に出会える幸運を祈りつつ、窓に張り付いてナラボー平原を見続けた。しかしこの旅行中は飛行機も含めて、空を飛ぶものを見ることができなかった。

出発前には、ほとんど変わらない景色を見て、限られた列車の中で退屈し時間をもてあますのではないかと

思っていた。しかし、土の色や、灌木が生えているかいないかというような、ほんのささやかな変化が、こんなに楽しく面白くまた、印象深いことを発見した。退屈している暇がなかった。

8. オフ・トレインツアー 露天掘り鉱山

二日目の夕食後にカルグーリーに着く。もう一つのハイライトである「オフ・トレインツアー」があった。スーパーピットと呼ばれている、金の露天掘り鉱山を見に行くツアーだ。

寝静まってしまったような街をバスで観光しながら、金鉱まで行った。世界で2番目の露天掘り鉱山だそう。資料によれば、幅1.5km、長さ4km、深さ280mという途方もなく大きな穴を掘っている。直径5mのタイヤがついているトラックが、ミニカーのように見える。照明に照らし出され、昼間の見学よりダイナミックな景観だったのではないだろうか。最終段階にいくと現在の3倍ほど深く掘り下げることになるそう。いったいその後はどうなってしまうのだろうか。

また、この水は海水の6倍以上の濃度で、生活用水には適さないため、パースから水を買っているそう。パイプラインで運んでいるのだろうが、パース～カルグーリー間は地図で見ても900km近くはありそうである。日本のスケールでは計りきれない大きさを感じた。

9. 終着駅 パース

三日目の昼には目的地のパースに到着する。窓の外の景色も少しずつ変わり、家屋が景色に加わるようになる。いつしか直線の線路も終わり、長い列車の先頭車両が窓の右や左に見えるようになっていた。

パースも美しい都市だった。アメリカズカップで有名なフリーマントルまで足を伸ばし、さらにロットネスト島へ渡ってみた。インド洋は、気が遠くなるような美しさであった。

帰りは、飛行機を利用して3時間ほどでアデレードへ戻った。寮に帰り着いた時、自分の家に戻ったようなホッとした気持ちになった。

その後息子は寮を出て、友人と部屋をシェアして1年間暮らした。そして昨年暮れに帰国し、社会人となった。今年は彼の友人たちが日本にやってくるらしい。